文禄・慶長の役における朝鮮半島南岸構築の倭城に見る役割と機能

金　泰　虎

はじめに
1．侵略開始から平譲城戦闘の敗北による漢城撤退までの南海岸倭城
(1) 侵略初期
(2) 海戦の敗北
(3) 平壌城から漢城への撤退
(4) 漢城駐屯
2．朝鮮半島の南海岸へ撤退した後の倭城
(1) 南海岸への撤退
(2) 明との講和交渉の成立
3．慶長期の再侵略における南海岸倭城
おわりに

はじめに

文禄・慶長の役は、最終的には日本軍が動員した兵士の大勢を失って日本に撤退する結果に終わった。しかし侵略当初、日本軍が平壌城まで進撃したことや、その後、7年間も朝鮮半島の南海岸に居座っていたことに注目した場合、その進撃や籠城における倭城の存在は重要だったと言えよう。このように考えるとき、倭城の在り方やその機能と役割の追究は、文禄・慶長の役を分析する上で、一つの有効な方法であることに違いない。

倭城とは、日本軍が朝鮮半島に築いた城で、従来の研究では朝鮮半島を縦断する道沿いに築いた「伝えの城」と[1]、日本軍の平壌城での戦闘以来、朝鮮半島の南部に撤退して南海岸に築いた「仕置きの城」とに大別されている[2]。

この中でも、殊に後者の「仕置きの城」に対する研究が行われて、戦前や1970年代の研究を有し[3]、最近になって再び盛んになっている[4]。この研究の特徴は、現地に足を踏

1）「伝えの城」に関する研究はほとんどないが、白峰旬「文禄・慶長の役における秀吉朱印状（城郭関係分）について」（『倭城の研究』3号、城郭談話会、1999年）や同氏「文禄・慶長の役における豊臣政権の諸城普請について」（三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館、2000年）で若干言及している。

2）『倭城の研究』（創刊号、城郭談話会、1997年）や前掲白峰「文禄・慶長の役における秀吉朱印状（城郭関係分）について」など。

3）伴三千雄「南鮮に於ける慶長文禄の築城（1～8）」（『歴史地理』36－5・6、37－2・3・4・5・6、38－1、1920・21年）や『倭城Ⅰ』（倭城址研究会、1979年）など。

み入れた基礎調査の成果によるものと言えよう。その結果、各倭城は縄張りや石垣、そして天守など全貌が明らかになりつつあり[5]、倭城相互間の関係の追究も行い始めた。

「仕置きの城」の現地調査を行った高田徹氏は、順天倭城や南海倭城のセット説を[6]、角田誠氏は巨済島の長木浦に築城した倭城が鎮海湾沿岸の他の倭城群と連動して拠点の確保のために機能したという見解を示している[7]。この両研究は、従来の倭城の研究が個別城郭の水準に止まって十分に解明されていなかったのを、南海岸の複数の倭城における相互連関性を探りつつ、その機能と役割を分析することに一歩を踏み出したものと言えよう。もちろん、両氏の研究は南海岸倭城の全体的な視点にまでは及んでいないものの、倭城を総体的に考える上で示唆することは大きい。

また、白峰旬氏は「文禄・慶長の役における秀吉朱印状（城郭関係分）について」で個別倭城の観点を超越して、戦況の推移に応じて、朝鮮半島全域における倭城の変化を巨視的に検討している。ここで氏は秀吉朱印状を年代順に整理して、その内容を綿密に分析した上、日本軍が朝鮮侵略開始から築いた倭城は戦況に応じて「伝えの城」から「仕置きの城」へ変化したという図式を示している[8]。さらに、氏は「文禄・慶長の役における秀吉の城郭戦略」で文禄・慶長期の倭城を網羅的に取り上げて諸城築城と秀吉の戦略的意図や運用についても分析を行っている[9]。

白峰氏の行った前者の研究において戦況にフォーカスを合わせて倭城の推移を図式化した点は高く評価できる。なお、この前者をベースにして論じた後者の研究も倭城の全体を把握する上で重要な研究と言える。しかし、前者の研究での変化図式からはずれる巨済島や熊川の倭城も存在しており、これらを抜きにした評価にはいささか問題点があると言えよう。また、後者の研究では「伝えの城」や「仕置きの城」の機能と役割を明らかにしないまま、秀吉の戦略と倭城の運用を論じたため、実際「仕置きの城」の果たした戦略・戦術的意味が明瞭になっていないところがある。ただ、後者の研究における、このような問題点は白峰氏だけではなく、従来の研究において共通に指摘できることである。

したがって本稿では、これらの先行研究に学びつつ、これを批判的に検討して「仕置きの城」を中心に分析を行う。その中で、戦況に応じて城郭と戦略を絡ませ、各倭城の特徴

4）代表的なものとして『倭城の研究』（創刊号～4号、城郭談話会、1997～2000年）が取り上げられよう。

5）例えば、縄張りについては木島孝之「倭城と国内城郭の縄張り構造からみた近世初頭期大名権力の様相」（『倭城の研究』2号、城郭談話会、1998年）、石垣は堀口健弐「南海倭城の石垣」（『倭城の研究』4号、城郭談話会、2000年）、天守に関しては「倭城の天守について」（『倭城の研究』2号、城郭談話会、1998年）が取り上げられる。

6）高田徹「南海倭城の縄張り」（『倭城の研究』4号、城郭談話会、2000年）。

7）角田誠「文禄・慶長の役における港湾防御の一形態」（『倭城の研究』創刊号、城郭談話会、1997年）。

8）前掲白峰「文禄・慶長の役における秀吉朱印状（城郭関係分）について」

9）白峰旬「文禄・慶長の役における秀吉の城郭戦略」（『城郭研究室年報』10号、姫路市立城郭研究室、2001年）。

に基づいた分類を行って論を進めていく。さらには、史料用語に沿う形で各時期の倭城の機能と役割を追っていきたい。この試みによって、文禄・慶長の役における倭城の在り方だけではなく、倭城を中心とする日本軍の戦略・戦術も明らかになるだろう。

1．侵略開始から平壌城戦闘の敗北による漢城撤退までの南海岸倭城

本章では文禄元（1592）年４月12日、日本軍が釜山に上陸してから平壌城の戦闘で朝・明軍の反撃をうけて漢城（ソウル）へ撤退し、文禄２（1593）年４月18日、南海岸に撤退するまで、朝鮮半島の南海岸に日本軍の築いた倭城にはどのようなものがあり、いかなる機能と役割を果たしていたのか、戦況を追いつつ分析を行うことにする。

(1) 侵略初期

日本軍は朝鮮侵略に踏み切る前、その準備に取り組み、文禄元年に侵略のベースキャンプである名護屋城を完成させた。その後、侵略に乗り出す１ヶ月前の文禄元年３月13日、秀吉が小早川隆景に宛てた朱印状には次のようにある[10]。すなわち、「高らいの船付江、先九州四国中国人数、御書付次第のことく罷渡、彼船付ニ城ヲ可仕候旨、被仰候条、成其意、渡海之者共申談、普請申付」とあり、朝鮮半島での「船付」の築城を渡海した諸大名と相談して普請することを指示している。この「船付」として築かれたのは釜山浦の釜山倭城であると言えよう。このように秀吉は朝鮮侵略に先立って、すでに朝鮮半島の南海岸に「船付」が可能である倭城の築城を計画していた。

いよいよ文禄元年４月12日、日本軍の朝鮮侵略が始まり、日本軍の一番隊を率いて釜山に上陸した小西行長は、東莱城と釜山城を相次いで陥落させた。引き続き、大邱・仁洞・尚州・忠州を次々と制圧し、漢城を目指して朝鮮半島を縦断して進んだ。日本軍の進撃が続く４月25日、秀吉が黒田長政に送った感状には「只今渡口ニ構城郭」とあって、「渡口」に城郭の普請を指示している[11]。この「渡口」は朝鮮侵略の前から計画していた「船付」場としての釜山浦の釜山倭城であり[12]、秀吉はこの釜山倭城の築城を促しているものと思われる。

このように侵略の準備段階から「船付」としての機能と役割を果たすことを目的としていた釜山倭城は、４月の朝鮮侵略とほぼ同時に築城されて「船付」の施設を完成し、物資の陸揚げや兵士の上陸などの機能と役割を果たしたものと思われる。

ところが、秀吉は釜山倭城の築城だけではなく、６月３日には漢城から明の国境まで「繋ぎの城」の普請を命じ[13]、また11月10日には「伝えの城」を構えて兵糧を備蓄する

10）『大日本古文書』「小早川家文書」５号。
11）「長政記」（『黒田家譜』１巻、文献出版、1983年）206頁。
12）以下からは朝鮮邑城と差別化を図るために日本軍が築城した城には「倭」を加えることにする。
13）前掲「長政記」210頁。

ように命じている[14]。この秀吉の命令は、日本軍の陸上戦における順調な勝利に基づく「縦のライン」の整備とも言えよう。この縦のラインとは、日本軍が釜山に上陸して朝鮮半島を縦断しつつ、漢城、ひいては前線まで繋ぐ戦術・戦略に基づく倭城の配置と定義しておきたい[15]。

朝鮮侵略の玄関口でもあるこの釜山倭城は「船付」として縦のラインでの動きに連動しつつ、最前線に繋ぐ機能と役割を果たしたので、釜山倭城の完備こそ縦のラインの充実に繋がったと思われる。このように南海岸には釜山から漢城、ひいては前線にまで繋がる縦のラインを支え、朝鮮侵略を行う日本軍にとっては欠かせない釜山倭城が築城された。

また日本軍は、次のように慶尚道の南海岸にも「要害」（倭城）を構えて在番したのである[16]。

三奉行渡海ノ後、（中略）慶尚道ノ内ニモ要害ヲ構ヘラレ、各被守之、又城番等ヲ被置、其次第

一釜山浦城　　筑前中納言秀秋
　　御目付
　　太田小原吾政信
一安骨浦城　　立花左近将監宗茂
　　右人数五百人
一加徳城　　筑紫上野介廣門
　　高橋九郎元種
　　右人数千人
一竹嶋城　　毛利藤四郎秀包
　　右人数千人
一西生浦城　　浅野左京太夫幸長
　　右人数三千人
　　（下略）

この史料からは南海岸に安骨浦倭城・加徳倭城・金海竹島倭城・西生浦倭城も築城されたことがわかる。これらの築城時期の推測には、「三奉行渡海ノ後」が一つの手がかりになろう。すなわち秀吉の命令によって、文禄元年6月3日、朝鮮奉行人が派遣され[17]、7月17日に漢城入りを果たした[18]。ところで「釜山浦城」（釜山倭城）は、「船付」だけ

---

14)「加藤光泰貞泰軍功記」（『続々群書類従』3輯、続群書類従完成会、1970年）15頁。

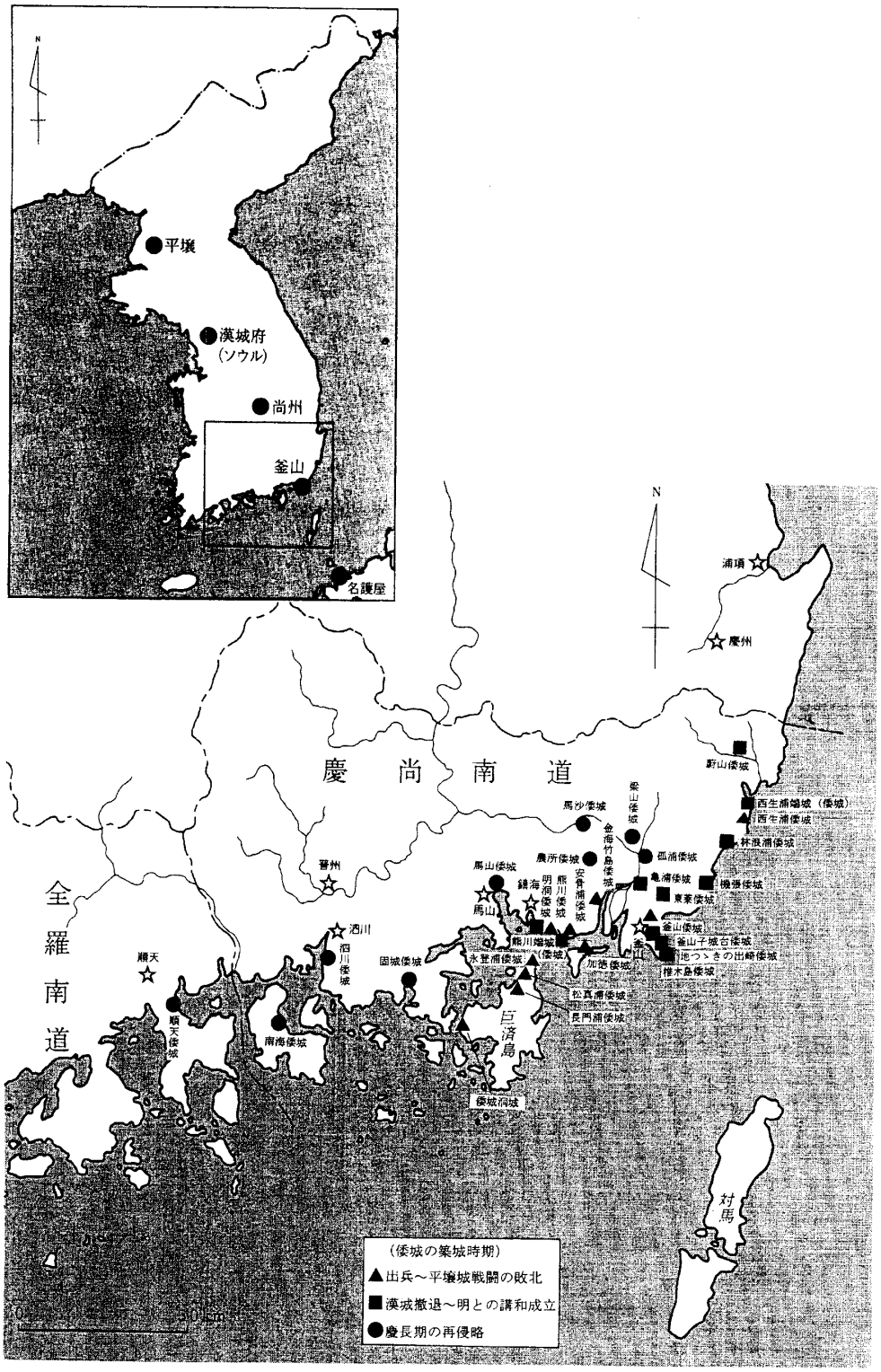
15) この「縦のライン」という定義は、すでに前掲白峰「文禄・慶長の役における秀吉の城郭戦略」が類似の定義を行っている。拙稿完成後、白峰氏の論文の存在について黒田慶一氏からご教示をいただいた。

16)『佐賀県近世史料』1編1巻（佐賀県立図書館、1993年）649～650頁。

17)『大日本古文書』「毛利家文書」904号。

18) 前掲「加藤光泰貞泰軍功記」

ではなく、要害としての機能と役割も果たしたのである。次の（図１）で、倭城の位置関係が確認できる。出兵から平壌城戦闘の敗北までに築かれた南海岸の倭城は、▲印で示している。



（図１）朝鮮半島の南海岸に構築した倭城の位置

(2) 海戦の敗北

ところが、地上戦では日本軍が朝鮮軍を一方的に破っていたが、海戦では状況が全く異なっていた。文禄元年5月初旬、日本水軍は李舜臣の率いる朝鮮水軍に初戦から敗戦を喫している[19]。6月頃、「其頃、又唐嶋表（＝巨済島）へ番船多く出るのよし、都へ聞こえければ、脇坂・九鬼・加藤三人は番船押しのためにとて、急ぎ熊川に馳行ける」とあり[20]、朝鮮番船に対応するために巨済島付近に脇坂安治・九鬼嘉隆・加藤嘉明を向かわせたのである。

ところが、6～7月にかけて栗浦・唐浦・閑山島においても日本水軍は朝鮮水軍に大敗した。特に、7月6～9日にかけて見乃梁海戦の直後の14日、秀吉は脇坂安治に次のように命じる。「からいさんに城を拵、九鬼大隅守・加藤左馬介、両三人申談、竪（堅）在番可仕候」とある[21]。日本水軍の敗北は、「船付」の釜山倭城、ひいては縦のラインにまで影響を与えたに違いない。したがって、海戦の惨敗を克服し、また不利な海戦を避けるために、からいさん（巨済島）に築城を命じたのであろう。これによって釜山倭城以外の築城が始まる。巨済島に具体的にどのような倭城が築かれたのかは不明であるが、これが後に永登浦倭城・松真浦倭城・長門浦倭城・倭城洞城[22]へ発展していくものと思われる。

なお、11月10日には「一、来春被成御渡海、一揆原番船已下撫切被仰付、可属平均候、其間之義、縦敵船取懸候共、陸地へ取上り指動不可有之候条、城竪（堅）固相拘可有之候（下略）」のように、秀吉が脇坂安治に来春の自分の渡海までは朝鮮水軍と戦うことを避けて、陸上で城を固く守るようにして海戦停止を命じた[23]。これによって巨済島の倭城は日本水軍の船が避難できる港を提供するようになった。秀吉は日本水軍が朝鮮水軍に勝

19）拙稿「16世紀末の東アジアにおける国際関係とイエズス会－文禄・慶長の役における日本軍の従軍司祭を中心に－」（『地域と社会』2号、大阪商業大学比較地域研究所、1999年）156頁。ここでは李舜臣の海戦を表で整理したが、文禄元年において日本水軍はすべての戦いで朝鮮水軍に惨敗している。

20）「脇坂記」（『続群書類従』20輯下、続群書類従完成会、1970年）。

21）『兵庫県史』（史料編中世1、兵庫県、1983年）「脇坂文書」12号。

22）この倭城洞城の築城時期をめぐっては異見がある。つまり、『慶南의　倭城址（慶南の倭城址）』（釜山大学校韓日文化研究所、1961年、韓国）や沈奉謹『韓国　南海沿岸　城址의　考古学的研究（韓国南海沿岸城址の考古学的研究）』（学研文化社、1995年、韓国）は、築城について未詳としながらも、文禄期であると推測している。一方、ほとんどの日本での研究は再侵略にあたる慶長期に築かれたとしている。両説とも証明はされておらず、韓国の文禄期築城説も日本軍の海戦敗北以降か、それとも漢城から南海岸へ撤退以降か明確ではない。ところで、高田徹は「巨済島4倭城の縄張りについて」（『倭城の研究』創刊号、城郭談話会、1997年）32頁で、倭城洞城が立地条件や縄張りからみると、見乃梁海峡、あるいは朝鮮半島本土と巨済島を連絡する船舶の航行を意識して造られたとする。また、中西豪も「朝鮮側にみる倭城－その観察と理解の実相－」（『朝鮮学報』125号、朝鮮学会、1987年）において同じ見解を示しており、両氏は倭城洞域が、海上警戒の役割と機能を果たしたとみなしている。本稿では文禄元年7月の見乃梁海戦での敗北後、つまり海上警戒にも考慮して巨済島での倭城築城の一環として築かれたものと推測している。

23）『兵庫県史』（史料編中世1、兵庫県、1983年）「脇坂文書」13号。

ち目のないことを知って、戦わせず兵力や船を温存させる道を選んだのである。巨済島倭城の築城や海戦停止令は日本水軍の避難や兵力温存の意味合いから理解されよう。つまり、船や兵力の温存は縦のラインを助けることにつながり、その意味で巨済島の倭城は縦のラインを援助する機能と役割を果たしたと言える。

日本水軍の敗北は、南海岸に巨済島の倭城だけではなく、熊川倭城を築城することにもつながった。文禄元年７月16日、「こもかい釜山浦ニ舟共可有之間、岐阜宰相より奉行を出し付立、船頭飯米以下申付警固船ニ可遣旨、堅可申聞事」[24] とある。熊川倭城では釜山倭城と同じように船を停泊させ、警戒を怠らないように命じている。これも朝鮮水軍を警戒するために日本水軍の船が避難して停泊する「船付」であったと思われる。

熊川倭城は、積極的に警固の役割を果たす。すなわち同11月10日には、「一、こもかい口警固船分残置、其外諸手之船共、慥奉行相添可漕戻候」[25] とあり、熊川に警固船を残して、他の船、つまり安全のために避難している船は奉行に添えて戻ってくるように命じている。この熊川倭城が海の警戒や海戦に備え、ひいては釜山倭城を守るための港として機能と役割を果たしたことが裏付けられる。このことから、すでにこの時期に熊川倭城が築城されて機能していたものと思われる[26]。熊川倭城は朝鮮水軍の見乃梁海峡以東への移動を阻む城として、また縦のラインにとって要である釜山倭城を守る城としての役割を果たしていたと言えよう。

このように巨済島と熊川における倭城の築城は、文禄元年の５～７月、日本水軍の海戦敗北によって始まった。巨済島の倭城や熊川倭城は日本水軍の温存と共に朝鮮水軍の警戒や見乃梁海峡以東への進出を牽制する役割を果たしたと思われる。つまり、縦のラインが整備される間、「伝えの城」や「繋ぎの城」ではない倭城が巨済島や熊川、そして安骨浦・加徳島・金海竹島・西生浦に築城されており、「伝えの城」から「仕置きの城」へとする白峰旬氏の図式化ではとらえられないことになる。すなわち、南海岸の巨済島や熊川、そして安骨浦・加徳島・金海竹島・西生浦の倭城は、釜山倭城から漢城及び前線にまで伸びる縦のラインを援護するための機能と役割を果たしたと言えよう。

(3) 平壌城から漢城への撤退

日本軍は、朝鮮侵略を開始してからわずか20日後、文禄元年５月２日に朝鮮王朝の都である漢城を占領した。５月８日、宇喜多秀家の部隊が漢城入りをした後、「八道国割」を行って諸大名は朝鮮の各地を割り当てられて進撃を続けた。

各武将は朝鮮の各地へ侵攻し続け、平安道に進撃した小西行長は、６月13日に平壌城を

---

24)『高山公実録』上巻（清文堂、1998年）69頁。

25) 注（23）と同じ。

26) 井原今朝男「上杉景勝の朝鮮出兵と熊川倭城」(『研究紀要』３号、長野県立博物館、1997年) 28～32頁では、文禄元年７月中旬から11月段階で熊川口に秀吉軍の警固船がおかれて重要な役割を持ったが、文禄２年６月に上杉景勝が渡海して熊川倭城を築いたとする。

占領した。ところが、この時期を境にして、朝鮮側に明の援軍が加わることもあって、小西の進撃の勢いが止まる。一進一退の攻防が続く中で、9月初めには小西と明の沈惟敬が会談を行い、50日間の休戦協定が結ばれた[27]。この休戦が実施された後も、講和交渉は一向に進まず、翌文禄2（1593）年から朝鮮・明軍の本格的な反撃が始まる。

文禄2年1月7日、朝鮮・明軍の総攻撃によって、小西の率いる部隊は平壌城から撤退を余儀なくされた。小西はいち早く同月16日に漢城に還った。

そこで1月23日、小西が平壌城から撤退した後の戦況について増田長盛・大谷吉継・石田三成・加藤光泰・前野長泰が連署して長束正家・山中橘内・木下半介に宛てて注進状を書いた。その中には、次のように記している。

（A）一、釜山浦之湊へ当国・大明之番舟、自然おし入可申段気遣に存候之条、ふさんかい湊口両方に城々無御座候て不叶所にて御座候、然者輝元陳所道筋にても無之候之間、釜山浦へ可被出之旨、安国寺申談差越候、彼城所彼是絵図を以て申上事[28]

すなわち、ふさんかい（釜山浦）の湊が朝鮮と明の水軍の番船によって攻撃されたら城がないともたないので、「湊口両方」に城を築く必要がある、と述べている。

平壌城戦闘の敗北後、釜山浦の周辺に釜山倭城以外の倭城を築城する計画をしたのは、朝・明の水軍の攻撃に備えて戦うための倭城を確保し、釜山倭城の防御、引き続き釜山から前線に至る縦のラインへの間接的な支援を狙ったものと理解される。

この「湊口両方」の倭城については特定できないものの、釜山子城台倭城[29]、椎木島倭城、加徳倭城、金海竹島倭城と推測される。なぜなら、漢城から撤退する前にいち早く、文禄2年2月27日「釜山海・椎木嶋・加々嶋」に築城して人数をおくこと[30]、また日本軍が漢城から撤退する前の文禄2年3月10日の時点で、すでに秀吉が毛利重政に金海竹島倭城の在番を命じているからである。ここで、釜山海は釜山子城台倭城、椎木嶋は椎木島倭城、加々嶋は加徳倭城と考えられる[31]。要するに、この「湊口両方」の築城も巨済島や熊川の倭城と同様、縦のラインを重視したことによって立案され、釜山倭城を守るさし当たりの補強策であったものと思われる。

27）『宣祖修正実録』宣祖25年9月。

28）「金井文書」（北島万次『豊臣秀吉の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房、1990年）331頁。

29）日本では、「釜山子城台倭城」を「釜山支城」と呼んでいるが、本稿では韓国での名称を使うことにした。

30）『福岡県史近世史料編・柳川藩初期（上）』（西日本文化協会、1986年）326号。

31）『大日本古文書』「浅野家文書」85号によれば、文禄2年4月22日には、加徳倭城が完成している。前で述べてきたように、日本軍の平壌城戦闘での敗北以前、すでに要害として構えていた。したがって、釜山倭城の防御の一貫として再編成した際は、改築の時間があまり要せずに、早く完成したものと思われる。

(4) 漢城駐屯

ところが、朝鮮の各地に分散して進撃していた日本軍が、小西行長の平壌城戦闘の敗北から漢城への撤退を境にして、次々と漢城へ帰陣しはじめ、文禄2年2月29日、咸鏡道へ侵攻していた加藤清正を最後に撤収を完了した。3月10日の秀吉朱印状には「釜山浦ニ在之普請衆」とあって普請衆を配置しており[32]、日本軍が漢城から南海岸まで本格的に撤退する前、すでに南海岸に倭城の築城に携わる人数を準備していたことがわかる。

引き続き卯月11日、毛利輝元に宛てた秀吉朱印状には次のように記している[33]。

（B）三月八日三通之趣、并児玉三郎右衛門尉差越、口上被聞召届候、其方事至釜山浦相越、船懸事、島々こもかい口城六七ヶ所、被申付候由、尤思召候、殊かこい船被拵之旨、是又被聞召届候、就其、御仕置之様子、委曲以御一書、浅野弾正、黒田勘解由被仰含被遣候、都衆之儀も、近日可罷出候間、各相談、可随其候

つまり、4月に毛利輝元が釜山浦に在陣し、島々からこもかい（熊川）口周辺にかけて「船懸」のため城6～7ヶ所を築城すること、「かこい船」を設置すること、都（漢城）にいる武将も近日中には動員することが指示されている。熊川倭城の周辺にも釜山倭城と同じように幾つかの倭城を築いて守ろうとしたのである。

翌4月12日、秀吉の朱印状には「一、釜山浦、こもかい浦手ニ付て城々二十計も拵能候ハん哉」とあり、釜山・熊川の「浦手」に約20個の倭城を築城するように命じた[34]。

このように各地から漢城に撤退した日本軍に秀吉の命令が出された。つまり、日本軍の漢城在陣中は平壌城での敗北以降における朝鮮戦場での戦略と戦術を練り直す期間であったと言えよう。釜山倭城や熊川倭城の周辺にさらなる倭城を構築し、また他の地域にも新たな倭城の築城を計画して、いよいよ4月18日、日本軍は漢城から南海岸に撤退した。

このように日本軍の朝鮮侵略の初期から平壌城戦闘での敗戦による漢城への撤退の間、日本軍は釜山倭城を整備し、また海戦での惨敗を教訓として巨済島や熊川の倭城と、慶尚道内の要害として安骨浦倭城・加徳倭城・金海竹島倭城・西生浦倭城を築いた。

2．朝鮮半島の南海岸へ撤退した後の倭城

本章では、日本軍が漢城（ソウル）から南海岸に撤退して明との講和による停戦に至るまでの間、南海岸に築城した倭城の特徴やその役割と機能について考察する。

(1) 南海岸への撤退

文禄2（1593）年4月22日、秀吉が毛利輝元に宛てた朱印状[35]によれば、「湊口両方」

32）『大日本古文書』「浅野家文書」263号。
33）『大日本古文書』「毛利家文書」891号。
34）『大日本古文書』「毛利家文書」928号。
35）『大日本古文書』「毛利家文書」892号。

の倭城の普請が完成したことがわかる。つまり、平壌城戦闘の敗北によって命じた1月23日の築城命令が実行されたものと思われる。

日本軍が漢城から南海岸に撤退してからも、文禄元年に引き続き明との講和交渉が続行された。にもかかわらず、文禄2年5月15日、日本軍は攻撃の手を緩めず晋州城を攻めて、6月19日に陥落させた。これが第2次の晋州城の攻撃である。

文禄元年10月5日、日本軍の第1次攻撃の時には晋州城を陥落させることができなかった。その時は、牧使の金時敏を中心とする朝鮮軍民が一致団結して決死の総力防御戦を繰り広げたからである。しかし、第2次の攻撃では防御していた晋州倡義使の金千鎰と牧使の徐礼元が戦死し、もろくも陥落する。この晋州城の陥落は南海岸に倭城を築く上で大きな意義をもたらした[36]。つまり、日本軍の駐屯する朝鮮南部における政治・軍事的の要所である晋州城の制圧によって倭城の周辺において対抗する可能性のある朝鮮軍の拠点を一掃することに繋がったのである。この平定作戦が終わることで南海岸の倭城の構築が本格的に取り組まれる。平壌城戦闘の敗北による漢城への撤退から明との講和成立までの間に築城された倭城は、■印で示している。（図1）を参照されたい。

文禄2年4月17日、秀吉が加藤清正に宛てた朱印状には「赤国白国令成敗、海手ニ付て取続、御仕置之城々相拵、御人数・兵糧・鉄砲・玉薬、丈夫ニ被入置、年中ニ二度計宛、梁東川切ニ押詰」とあり[37]、倭城築城の狙いがかいま見える。つまり、南海岸に「仕置きの城」を築いて、年2回梁東川（鴨緑江）まで攻め上がるということである。「仕置きの城」を拠点にしつつ、平壌城の戦闘での敗北による挫折を克服して鴨緑江まで攻略する目的である。こうして、南海岸に撤退した後、朝鮮の再攻略のために築いた倭城が「仕置きの城」であり、それが攻撃の拠点になることがわかる。

では、次は日本軍が南海岸へ撤退した後、倭城の構築に投入した人数を現している三つの史料を分析する。そこで、既存の倭城を巻き込んで新たな倭城が築城され、いかなる機能と役割を果たすのか考察する。

史料（C）

一、日本ノ諸将、皆釜山浦へ引取ラレ所々ノ城々ヲ相守ラレ、又新城ヲ構ヘテ在城アリ（中略）
右城々諸将請取ノ覚

一、釜山浦并端城　椎木嶋　東菜　毛利秀元　一万七千六十人

一、熊川本城　小早川隆景　六千六百人

端城　毛利藤四郎　四百人　立花左近将監

史料（D）

一、城四ヶ所　安芸宰相・同侍　従父子番替ニ而二番事　羽柴小早川侍従　羽柴吉川侍従　羽柴久留米侍従　筑紫上野介

一、蔚山城壱ヶ所　羽柴対馬侍従

一、城二ヶ所　鍋嶋加賀守

一、城壱ヶ所　羽柴柳川侍従

36)『大日本古文書』「毛利家文書」898号。文禄元年5月22日の秀吉の朱印状には、「もくそ城取巻、悉討果、其上、城々普請等入情可被申付候」とある。つまり、明の勅使との講和交渉の結果と関わらず、晋州城を包囲して攻め落とした上、南海岸倭城の普請を行うように促している。

37)「脇坂記」巻上（『続群書類従』第20輯下、合戦部、1937年）。

千百三十三人
筑紫上野介
三百三十人
高橋主膳
二百九十人
一、唐嶋ノ内　蜂須賀阿波守
四千五百人
生駒雅楽頭
二千四百五十人
長曾我部土佐守
二千五百九十人
福嶋左衛門大夫
二千五百人
戸田民部少輔
二千三百四十人
一、加徳嶋　九鬼大隅守
八百三十四人
加藤左馬助
三百十四人
脇坂中務大輔
九百人
来嶋助兵衛
四百五十八人
菅平右衛門
百六人
一、熊川本城一箇所　加藤主計頭
六千七百九十人
相良宮内大輔
一、本城一箇所　嶋津兵庫頭
二千百二十八人
一、機張本城一箇所　黒田甲斐守
五千八十二人
一、西生浦本城并端城一箇所
鍋嶋加賀守
七千六百四十二人
一、本城一箇所　小西摂津守
七千四百十五人
端城　宗対馬守
松浦刑部卿
有馬修理大夫
大村新八郎
宇久大和守
右ノ外ニ　藤堂佐渡守
四千百七十三人
堀内安房守
五百七十四人
桑山小藤太
五百四人
杉若伝三郎
百八十五人
一、本城一箇所　毛利壱岐守
千六百七十一人
高橋九郎
七百四十一人
秋月三郎
三百八十八人
伊東民部少輔
七百六人
右、凡本城十一箇所側城七箇所
人数七万八千七百余人[38]

高橋主膳正
一、城壱ヶ所　黒田甲斐守
一、城壱ヶ所　毛利壱岐守
嶋津又七郎
伊東民部大輔
高橋九郎
秋月三郎
一、城壱ヶ所　羽柴薩摩侍従
一、城壱ヶ所　小西摂津守
一、城壱ヶ所　松浦刑部卿法印
宇久大和守
大村新八郎
有馬修理大夫
一、城壱ヶ所　加藤主計頭
相良宮内少輔
一、城壱ヶ所　福嶋左衛門大夫但番替ニメ
田民部大夫
一、城壱ヶ所　蜂須賀阿波守但番替ニメ
生駒雅楽頭
一、城壱ヶ所　羽柴土佐侍従
一、城壱ヶ所　九鬼大隅守
加藤左馬助
菅平右衛門
来嶋助兵衛
徳能
堀内安芸守
亀井武蔵守
藤堂佐渡守
脇坂中務少
杉谷伝三郎
桑山小藤太
桑山伝次郎但番替ニメ
以上城数合十八
（中略）
文禄二年
五月朔日　太閤朱印
浅野弾正少弼とのへ
黒田勘解由とのへ
増田右衛門尉とのへ
石田治郎少輔とのへ
大谷刑部少輔とのへ[39]

史料（E）

朝鮮国御仕置之城々覚

一、釜山浦本城　　壱万七千六拾人　　羽柴安芸宰相
一、椎木嶋端城　　同人
一、地つゝきの出崎端城　　同人
以上三ヶ所
一、こもかい本城　　六千六百人　　羽柴小早川侍従
一、端城　　四百人　　羽柴久留米侍従
千百三十三人　　羽柴柳川侍従
三百三十人　　筑紫上野介
二百九十人　　高橋主膳正
右合八千七百五十三人
以上二ヶ所
一、唐嶋内一ヶ所　　四千五百人　　蜂須賀阿波守
弐千四百五十人　　生駒雅楽頭
右合六千九百五拾人
一、唐嶋内二ヶ所　　弐千五百九拾人　　羽柴土佐侍従
弐千五百人　　福嶋左衛門大夫
弐千参百四拾人　　戸田民部太輔
右合七千四百三十人
一、かとく嶋　　八百三拾四人　　九鬼大隅守
三百十四人　　加藤左馬介
百六人　　菅平右衛門
四百五十八人　　来嶋介兵衛
百拾弐人　　得居
九百人　　脇坂中務少輔
右合弐千七百弐拾三人　　番替
千四百七十三人　　藤堂佐渡守
五百七拾四人　　堀内安房守
百八十五人　　杉若伝三郎
五百四人　　桑山小藤太
同小伝次
右合弐千七百三十六人　　番替
一、本城壱ヶ所　　千六百七十一人　　毛利壱岐守
七百四拾壱人　　高橋九郎
三百八拾壱人　　秋月三郎
四百七十六人　　嶋津又七郎
七百六人　　伊藤民部
右合三千九百八十人
一、本城一ヶ所　　六千七百九十人　　加藤主計頭
一、端城一ヶ所　　同人
相良宮内少輔
以上二ヶ所
一、本城一ヶ所　　弐千百弐拾八人　　羽柴薩摩侍従
一、本城一ヶ所　　五千八拾二人　　黒田甲斐守
一、本城一ヶ所　　七千六百四十二人　　鍋嶋加賀守
一、端城一ヶ所　　同信濃守
以上二ヶ所
一、端城一ヶ所　　羽柴対馬侍従
一、もと城一ヶ所　　七千四百拾五人　　小西摂津守
一、端城一ヶ所　　松浦刑部卿法印
宇久大和守
大村新八郎
有馬修理大夫
以上三ヶ所
城数合拾八之内　もと城十一
端城七
人数合七万八千七百人
（中略）
以上　　秀吉
文禄癸巳年五月廿日　　御朱印[40]

日本軍は南海岸に撤退して、史料（C・D・E）で確認されるような倭城の普請に取りかかるが、侵略の時に組んだ番隊がそのまま維持される傾向がある。例えば、（表1）の6番隊は唐嶋（巨済島）の倭城の普請に取りかかる。（D）の「但し番替ニ〆」や（E）の「番替」ように、編成を替えることがあるものの、基本的には侵略当時の番隊が維持される傾向が支配的である。

ところが、「仕置きの城」であっても、すべてが同じ機能と役割を果たすものではないことが（C）のアンダーラインからわかる。つまり、「本城十一箇所側城七箇所」のように「仕置きの城」には、それぞれ「本城」と「側城」という機能と役割の相違が生まれたものと思われる。

ところが、（C・D）のアンダーラインでは「本城十一箇所側城七か所」や「以上城合十八」とある。すなわち、前者は「仕置きの城」の機能と役割を区別し、後者はその合計の数を記している。さらに（E）の「城数壱拾八之内もと城十一端城七」と（C）の「本城十一箇所側城七か所」からは、「側城」と「端城」とが同じ意味の城郭と断定できる。

では、南海岸にはいくつの「仕置きの城」が築城されたのか。史料（C・D・E）は、それぞれ「本城」や「端城」の数に正確さを欠いている。実際、文書上の合計の数は三つとも18ヶ所である。ところが、史料上の単純な合計の数ではなく、内容に記されている倭城の数を単に数えると、（C）15ヶ所・（D）18ヶ所・（E）19ヶ所になる。

そこで、三つの史料に現れる「仕置きの城」や普請者を照らし合わせてまとめたのが（表2）である。ところが、（表2）をさらに踏み込んで分析すると（表3）のようになる。つまり（C・D・E）においてそれぞれ対応するはずの倭城に相違がみられるのを横棒で塗りつぶして数えると、「仕置きの城」は21ヶ所にも上る[41]。単純に数えた「仕置きの城」の数が相違するのは計画の変更による可能性も考えられる。しかし、（D・E）の文書がそれぞれ文禄2年5月1日や20日付であり、内容もほぼ同じで大きな相違点は見受けられない。但し、そこでは番替がみられることから、（C）が（D・E）より早く成立した可能性が高い。（C）は平壌城での敗戦から南海岸に撤退する間に書かれたものと思われる。

もう少しつぶさに（表3）をみると、（D・E）には倭城が確認されるが、（C）で確認できないのが、⑤・?・⑦・⑧・⑫・⑲の六つである。特に、（C）や（D・E）の間では、普請に関わった武将の配置がほぼ同じではあるが、18・19・20・21の配置の差が目に付く。

ここで城名を特定すると、⑧は唐嶋の内一ヶ所（Dによる）、⑭は機張倭城・⑮は西生

38）「鍋島直茂譜考補」（『佐賀県近世史料』1編1巻、佐賀県立図書館、1993年）。

39）『豊公遺文』（博文館、1914年）や「征韓録」（校注北川鉄三『島津史料集』戦国史料叢書6、人物往来社、1966年）。

40）『楓軒文書纂』（下巻、内閣文庫影印叢刊、国立古文書館内閣文庫、1985年）56～57頁。影印文書の判読に当たっては仁木宏氏のご教示をいただいた。

41）注34）と同じ。

（表１）文禄の役における日本軍の編成

番　隊		武　　将	動員兵力数
第１番隊		羽柴対馬侍従（宗義智）	5,000人
		小西摂津守（小西行長）	7,000人
		松浦刑部卿法印（松浦鎮信）	3,000人
		有馬修理大夫（有馬晴信）	2,000人
		大村新八郎（大村喜前）	1,000人
		五嶋大和守（五島純玄）	700人
第２番隊		加藤主計頭（加藤清正）	10,000人
		鍋嶋加賀守（鍋島直茂）	12,000人
第３番隊		相良宮内大輔（相良長毎）	800人
		黒田甲斐守（黒田長政）	5,000人
		羽柴豊後侍従（大友義統）	6,000人
第４番隊		毛利壱岐守（毛利吉成）	2,000人
		羽柴薩摩侍従（島津義弘）	10,000人
第５番隊		福嶋左衛門大夫（福島正則）	4,800人
		戸田民部少輔（戸田勝隆）	3,900人
		羽柴土佐侍従（長曾我部元親）	3,000人
		蜂須賀阿波守（蜂須家政）	7,200人
		生駒雅楽頭（生駒親正）	5,500人
		来嶋兄弟（来島通之・通総）	700人
第６番隊		羽柴筑前侍従（小早川隆景）	10,000人
		羽柴久留目侍従（毛利秀包）	1,500人
		高橋主膳（高橋直次）	800人
		筑紫上野介（筑紫広門）	900人
第７番隊		安芸宰相（毛利輝元）	30,000人
第８番隊		備前宰相（宇喜多秀家）	10,000人
第９番隊		岐阜宰相（羽柴秀勝）	8,000人
		丹後少将（細川忠興）	3,500人
船奉行	朝　鮮	早川主馬首（早川長政）	
		毛利民部大輔（毛利高政）	
		毛利兵橘（毛利重政）	
	対　馬	服部采女正（服部一興）	
		九鬼大隅守（九鬼嘉隆）	
		脇坂中務少輔（脇坂安治）	
	壱　岐	一柳右近大夫（一柳可遊）	
		加藤左馬助（加藤嘉明）	
		藤堂佐渡守（藤堂高虎）	
	名護屋	石田治部少輔（石田三成）	
		大谷刑部少輔（石田吉隆）	
		岡本下野守（岡本重政）	
		牧村兵太輔（牧村政吉）	

（注）『大日本古文書』（家わけ８、「毛利家文書」３）885・886号をもとにして作成した。

（表２）「仕置きの城」普請に関する史料Ｃ・Ｄ・Ｅの比較

史料Ｃ		史料Ｄ		史料Ｅ	
城　名	普請者	城　名	普請者	城　名	普請者
①釜山浦	1 毛利秀元	①城四ヶ所	1 安芸宰相･同侍従父子	①釜山浦本城	1 羽柴安芸宰相
②端城椎木嶋	1 同人	②	1 安芸宰相･同侍従父子	②椎木嶋端城	1 同人
？端城東莱	1 同人	？	1 安芸宰相･同侍従父子	③地つゝきの出崎端城	1 同人
④熊川本城	2 小早川隆景	？？	1 安芸宰相･同侍従父子	④こもかい本城	2 羽柴小早川侍従
⑤端城	3 毛利藤四郎	④	2 羽柴小早川侍従	⑤端城	3 羽柴久留米侍従
	●立花左近将監		■羽柴吉川侍従	？	4 羽柴柳川侍従
	5 筑紫上野介	⑤	3 羽柴久留米侍従		5 筑紫上野介
	6 高橋主膳		5 筑紫上野介		6 高橋主膳
⑥唐嶋ノ内	7 蜂須賀阿波守	⑰蔚山城壱ヶ所	34羽柴対馬侍従	⑥唐嶋内一ヶ所	7 蜂須賀阿波守
	8 生駒雅楽頭	⑮城二ヶ所	32鍋嶋加賀守		8 生駒雅楽頭
⑦	9 長曾我部土佐守	⑯	32鍋嶋加賀守	⑦唐嶋内二ヶ所	9 羽柴土佐侍従
⑧	10福嶋左衛門大夫	？城壱ヶ所	4 羽柴柳川侍従	⑧	10福嶋左衛門大夫
	11戸田民部少輔		6 高橋主膳正		11戸田民部太輔
⑨加徳嶋	12九鬼大隅守	⑭城壱ヶ所	31黒田甲斐守	⑨かとく嶋	12九鬼大隅守
	13加藤左馬助	⑩城壱ヶ所	23毛利壱岐守		13加藤左馬介
	17脇坂中務大輔		26嶋津又七郎		14菅平右衛門
	15来嶋助兵衛		27伊東民部大輔		15来嶋介兵衛
	14菅平右衛門		24高橋九郎		16得居
⑪熊川本城一箇所	28加藤主計頭		25秋月三郎		17脇坂中務少輔
	29相良宮内大輔	⑬城壱ヶ所	30羽柴薩摩侍従		18藤堂佐渡守
⑬本城一箇所	30嶋津兵庫頭	⑱城壱ヶ所	35小西摂津守		19堀内安房守
⑭機張本城一箇所	31黒田甲斐守	⑲城壱ヶ所	36松浦刑部卿法印		20杉若伝三郎
⑮西生浦本城	32鍋嶋加賀守		37宇久大和		21桑山小藤太
⑯西生浦端城一箇所	32鍋嶋加賀守		38大村新八郎		22同小伝次
⑱本城一箇所	35小西摂津守		39有馬修理大夫	⑩本城壱ヶ所	23毛利壱岐守
⑰端城	34宗対馬守	⑫城壱ヶ所	28加藤主計頭		24高橋九郎
⑲	36松浦刑部卿		29相良宮内少輔		25秋月三郎
	39有馬修理大夫	⑧城壱ヶ所	10福嶋左衛門大夫		26嶋津又七郎
	38大村新八郎		11戸田民部大夫		27伊藤民部
	37宇久大和守	⑥城壱ヶ所	7 蜂須賀阿波守	⑪本城一ヶ所	28加藤主計頭
	18藤堂佐渡守		8 生駒雅楽頭	⑫端城一ヶ所	28同人
	19堀内安房守	⑦城壱ヶ所	9 羽柴土佐侍従		29相良宮内少輔
	21桑山小藤太	⑨城壱ヶ所	12九鬼大隅守	⑬本城一ヶ所	30羽柴薩摩侍従
	20杉若伝三郎		13加藤左馬助	⑭本城一ヶ所	31黒田甲斐守
⑩本城一箇所	23毛利壱岐守		14菅平右衛門	⑮本城一ヶ所	32鍋嶋加賀守
	24高橋九郎		15来嶋助兵衛	⑯端城一ヶ所	33同信濃守
	25秋月三郎		16徳能	⑰端城一ヶ所	34羽柴対馬侍従
	27伊東民部少輔		19堀内安芸守	⑱もと城一ヶ所	35小西摂津守
			▲亀井武蔵守	⑲端城一ヶ所	36松浦刑部卿法印
			18藤堂佐渡守		37宇久大和守
			17脇坂中務少		38大村新八郎
			20杉谷伝三郎		39有馬修理大夫
					21桑山小藤太
			22桑山伝次郎		

（註）①史料Ｃ・Ｄは、比較しやすいように史料Ｅの順番に沿って番号をつけた。
②城名は史料用語の通りである。

（表３）史料Ｃ・Ｄ・Ｅの対応関係

史料C	史料D	史料E
①1	①1	①1
②1	②1	②1
×	×	③1
×	??	×
④2	④2	④2
×	■	×
⑤3	⑤3	⑤3
×	5	×
×	?4	?4
5	×	5
6	6	6
●	×	×
⑥7	⑥7	⑥7
8	8	8
9	⑦9	⑦9
10	⑧10	⑧10
11	11	11
⑨12	⑨12	⑨12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
×	16	16
17	17	17
×	18	18
×	19	19
×	20	20
×	21	21
×	22	22
×	▲	×
⑩23	⑩23	⑩23
24	24	24
25	25	25
×	26	26
27	27	27
⑪28	×	⑪28
×	⑫28	⑫28
29	29	29
⑬30	⑬30	⑬30
⑭31	⑭31	⑭31
⑮32	⑮32	⑮32
⑯32	⑯32	⑯33
⑰34	⑰34	⑰34
18	×	×
19	×	×
20	×	×
21	×	×
⑱35	⑱35	⑱35
36	⑲36	⑲36
37	37	37
38	38	38
39	39	39

浦倭城・⑯は西生浦端城・⑰は蔚山倭城（Ｃによる）である。しかし、（Ｃ）では④と⑪の二つともが熊川倭城となっているが、実は④が熊川倭城で、⑪は書き間違いと考えられる。

倭城は、釜山から前線にまで至る縦のラインから日本軍の南海岸への撤退に伴って、「仕置きの城」が南海岸に連なる横のラインへ変化していく。すなわち、この横のラインとは、朝鮮半島南海岸東端の西生浦城から西端の熊川城まで連なる「仕置きの城」の配置と定義したい。以下では横のラインにおける「本城」や「端城」が、いかなる機能と役割を果たしたのか、また「本城」や「端城」以外の倭城の存在についても分析を行うことにする。

1)本城

史料（Ｃ・Ｅ）でみてきた本城には、以前からあった釜山倭城・熊川倭城・巨済島の倭城（永登浦倭城・松真浦倭城・長門浦倭城）・西生浦倭城・加徳倭城、そして史料に記されていない金海竹島倭城・安骨浦倭城に加えて、南海岸へ撤収して新たに築いた機張倭城・林浪浦倭城・蔚山倭城が含まれる。

次の史料は南海岸倭城の在番を示しており、日本軍が南海岸に撤退してからの戦略・戦術を分析する上で手がかりになる。

史料（F）

一、西生浦ノ城	加藤主計頭
初ハ熊川	
一、セイクワンノ城	毛利壱岐守
	嶋津又七郎
	高橋九郎
	秋月三郎
	伊東民部少輔
一、機張ノ城	黒田甲斐守
一、釜山浦ノ城	毛利宰相秀元
一、東莱ノ城	同人
	毛利藤四郎久留米
一、カドガイノ城	毛利宰相秀元
	立花左近将監
	高橋主膳正
一、竹嶋ノ城	鍋嶋加賀守
初ハ西生浦	
一、同繋ノ城	同人
一、熊川ノ城	小西摂津守
一、安骨浦ノ城	九鬼大隅守
	加藤左馬助
	菅平右衛門
	四国 紀伊国船手ノ衆
一、唐嶋ノ城	嶋津兵庫頭
一、同所ノ城	福嶋左衛門大夫
	戸田民部少輔
一、同繋ノ城	右三人存知[42]

史料（G）

一、西生浦城一ヶ所	加藤主計頭
一、セイグハン城一ヶ所	毛利壱岐守
	嶋津又七郎
	高橋九郎
	秋月三郎
	伊東民部
一、クチャン城一ヶ所	黒田甲斐守
一、トクネキ城一ヶ所	久留米侍従並
	中国衆
一、カトカイ城	小早川侍従
	柳川侍従
一、釜山浦城	安芸宰相殿
一、竹嶋城	鍋嶋加賀守
一、同出城但コモカイ	同覚悟
ツナキ城也	
一、熊川城	小西摂津守
一、安骨浦城	
一、唐嶋城	薩摩侍従
一、同城壱	福嶋左衛門大夫
	戸田民部大輔

以上[43]

まず、（F・G）の成立時期は、在番内容にほとんど差がないことからほぼ同じ時期のものと推測される。ただ、カドガイノ城（亀浦倭城）の在番武将が異なっており、また（表4）の⑬が（G）には見られない。文禄2年7月27日、すでに島津義弘が巨済島の倭城の在番に着いていることから[44]、（F・G）は「仕置きの城」の普請完了から文禄2年末の間の在番と思われる。

日本軍の倭城在番においても普請と同様、同じ番隊の配置が確認される。つまり、（表4）の安骨浦倭城は船奉行が一体となって在番している。特に、目を引くのは本城を防御する一人の武将が端城までも防御の責任をもっていることである。例えば、史料（F）の釜山倭城やその周辺の端城である東莱倭城・カドガイノ城に毛利秀元が在番している。すなわち、本城を中心として端城の指揮まで本城の指揮官が統括しており、本城と端城が一体となって機能と役割を果たしているのである。

要するに、日本軍が南海岸に撤退してから「仕置きの城」の防御に当たっては同じ指揮官のもとで本城と端城が連係して本城を防御する体制が固められていると理解される。

42）前掲「鍋島直茂譜考補」
43）前掲『豊公遺文』
44）『大日本古文書』「島津家文書」956号。

この防御体制は、日本軍が漢城から南海岸に撤退して明との講和による停戦に至るまで敷かれる。この意味から横のラインは、縦のラインのような相互を繋ぐ意味合いよりは各本城を中心に防御する拠点が並んでいる傾向が強い。言い換えれば、基本的にそれぞれの本城は一つの防御単位として機能と役割を果たしつつ、隣接する他の本城とも防御に関する関係を保つのが横のラインである。

（表４）史料Ｆ・Ｇにおける日本軍の在番

史料F						史料G			
番号	城名	記号	在番者	F・G対応		番号	城名	記号	在番者
①	西生浦ノ城	a	加藤主計頭	①a	1 A	1	西生浦城一ヶ所	A	加藤主計頭
②	セイクワンノ城	b	毛利壱岐守	②b	2 B	2	セイグハン城一ヶ所	B	毛利壱岐守
		c	嶋津又七郎	c	C			C	嶋津又七郎
		d	高橋九郎	d	D			D	高橋九郎
		e	秋月三郎	e	E			E	秋月三郎
		f	伊東民部少輔	f	F			F	伊東民部
③	機張ノ城	g	黒田甲斐守	③g	3 G	3	クチャン城一ヶ所	G	黒田甲斐守
④	釜山浦ノ城	h	毛利宰相秀元	④h	4 I	5	トクネキ城一ヶ所	J	久留米侍従並中国衆
⑤	東莱ノ城	i	毛利宰相秀元	⑤i	5 J	6	カトカイ城	▲	小早川侍従
		j	毛利藤四郎久留米	j				▲	柳川侍従
⑥	カドガイノ城	k	毛利宰相秀元	⑥k	6▲	4	釜山浦城	I	安芸宰相殿
		l	立花左近将監	l	▲	7	竹嶋城	O	鍋嶋加賀守
		m	高橋主膳正	m		8	同出城但コモカイツナキ城	O	同覚悟
⑦	竹嶋ノ城	n	鍋嶋加賀守	⑦n	7 O	9	熊川城	P	小西摂津守
⑧	同繋ノ城	o	同人	⑧o	8 O	10	安骨浦城		
⑨	熊川ノ城	p	小西摂津守	⑨p	9 P	11	唐嶋城	U	薩摩侍従
⑩	安骨浦ノ城	q	九鬼大隅守	⑩q	10	12	同城壱	V	福嶋左衛門大夫
		r	加藤左馬助	r				W	戸田民部大輔
		s	菅平右衛門	s					
		t	四国紀伊国船手ノ衆	t					
⑪	唐嶋ノ城	u	嶋津兵庫頭	⑪u	11U				
⑫	同所ノ城	v	福嶋左衛門大夫	⑫v	12V				
		w	戸田民部少輔	w	W				
⑬	同繋ノ城	x	右三人存知	⑬z					

（註）①史料ＧはＦに沿って番号及び記号をつけた。

②城名は史料用語の通りである。

ところが、「仕置きの城」の中には本城や端城以外にも、史料（F）でアンダーラインを引いたように「繋ノ城」が確認される。「繋ノ城」と明記していることから、本城や端城とはそれぞれ機能と役割が異なるものと思われる。したがって、「仕置きの城」には本城や端城に加えて、「繋ノ城」の三つのタイプが存在すると言えよう[45]。

史料（F・G）の在番では、本城と端城は区別せず、これとは異なる倭城である「繋ノ城」の存在を浮き彫りにしている。（F）の「同繋ノ城」は、一見、竹嶋ノ城（金海竹島倭城）と関わる倭城と思われるが、（F・G）の対応関係を整理した（表4）から（G）の「同出城」と一致することがわかる。なお、但し書きに「コモカイツナキ城」とあり、「同繋ノ城」はコモカイ（熊川倭城）の「繋ノ城」である。このことから「繋ノ城」と「出城」が同じ意味と言えよう。

すでにみてきたように、普請に際しては本城と端城（側城）を区別したり、あるいは一体化したりして表記していた。普請に当たっては、本城と端城が重んじられ、在番には本城や端城はもとより「繋ノ城」までもが細かく配慮されていたと言えよう。『日本城郭辞典』によれば[46]、この「出城」は「城中から張り出して小城を築いたもの」と定義している。このことから推測すると、「繋ノ城」は本城から突き出ていながら、その外郭線に囲まれている城と見なせよう。

特に、（C）の「繋ノ城」で本城と同じ武将が在番に当たっていることから、「繋ノ城」は戦術・戦略上、本城や端城を補い合う関係であると推測できる。一方、「唐嶋ノ城（巨済島の倭城）」における「繋ノ城」の場合は一人の武将に任せていない。しかし、「右三人存知」のように「繋ノ城」の在番に「唐嶋ノ城」を防御する三人（嶋津兵庫頭・福嶋左衛門大夫・戸田民部少輔）をあてている。これは長木湾を挟んで、比較的、本城が隣接している巨済島ならではの事情から生じた在番の方法であろう。

同じ武将や同じ番隊の武将の指揮のもとで本城・端城・「繋ノ城」の在番が編成されていることから、本城中心の指揮系統のもと、端城や「繋ノ城」が本城防御の一端を担う機能と役割を果たしていたことは間違いない。

従来の研究では「仕置きの城」として本城や端城しか触れておらず、端城を支城と呼び、「繋ノ城」については言及していない。ただ白峰旬氏が「繋ノ城」について若干言及しているが、それを「伝えの城」と同じ意味の城郭に見なしている[47]。これについては、今後の検討課題にしたい。

このように本城は、たいていが端城や「繋ノ城」で補われつつ、単独で戦闘や防御を遂行する城＝「拠点的本城」と言えよう。秀吉の朱印状の中で本城は防御や攻撃の陣地、

45）前掲『倭城Ⅰ』や前掲白峰「文禄・慶長の役における秀吉の城郭戦略」などの日本における先行研究では「繋ノ城」を端城と見なしている。

46）鳥羽正雄『日本城郭辞典』（東京堂出版、1998年）。

47）前掲白峰「文禄・慶長の役における秀吉の城郭戦略」

必要な戦争物資の保管など拠点的機能と役割を果たすことが確認される[48]。

①「拠点的本城」

本城は、その機能と役割によって「拠点的本城」・「本営」・「境目の城」・「後方支援城」と分けて考えられよう。つまり、それぞれの「本城」には築かれている地域や戦況に相応しい特殊な任務を与えて戦争を遂行させているのである。

まず「拠点的本城」は、城に特定の役割や機能を担わせることなく、防御の一拠点としての任務を担った倭城と言えよう。機張倭城・林浪浦倭城・安骨浦倭城・金海竹島倭城・亀浦倭城がそれに当たる。しかし、同時にそれぞれの倭城は一つの拠点的本城でありながら、重要な本城である釜山倭城・熊川倭城・西生浦倭城を遠隔から防御することも念頭に入れて築城されたものと思われる。つまり、金海竹島倭城・亀浦倭城は釜山城、安骨浦倭城は熊川倭城、機張倭城は西生浦倭城の防御を念頭に入れたと言えよう。このように釜山倭城・熊川倭城・西生浦倭城はそれぞれ一つの本城として機能と役割を果たしたが、幾つかの他の本城（そして端城や「繋ノ城」を加える。）も遠隔からその防御に加わり、横のラインにおける3大防御圏をなしていた。例えば、史料（C）における「釜山并端城、椎木嶋　東莱」や「熊川本城端城」、そして「西生浦本城并端城一箇所」がそれを裏付ける。

②「本営」

日本軍の南海岸への撤退によって、釜山倭城は横のラインの戦略と戦術に対応する存在へと変化し、釜山倭城は「仕置きの城」の体制に組み込まれ、「本営」としての機能と役割を果たすようになる。秀吉の朱印状が釜山倭城を経由して朝鮮現地の各武将に伝達されていたことから[49]、釜山倭城は朝鮮戦場の全体に秀吉の命令を伝達する本部であった。このように釜山倭城は戦況に応じて変貌を遂げ、本城の中でも朝鮮「本営」として位置づけられる。

既存の釜山倭城があったにもかかわらず、（C）のように新たに築城の人数を配分していることは、従来担ってきた釜山倭城の機能と役割を、横のラインの展開に伴って、今後予想される戦局に合わせるために改築するための人数と思われる。

一方、釜山本営の周辺には、（A・C）からわかるように、端城を築いて固く防衛したのである。この端城は釜山本営の防御の一端を補いつつ、援護する機能や役割を果たしたと言えよう。

48）例えば、『佐賀県史料集成』（古文書編3、佐賀県立図書館、1958年）「鍋島文書」56号が上げられよう。

49）『大日本古文書』「毛利家文書」917号。なお、佐島顕子「文禄・慶長役期の秀吉朱印状の送達について」（『福岡女学院大学紀要』創刊号、福岡女学院大学、1991年）で、釜山倭城を経由して朱印状が伝達された点を明らかにしている。

③「境目の城」

「拠点的本城」としての防御に加えて、特殊な役割や機能を担わせて東西の両端を防衛する「境目の城」である熊川倭城や西生浦倭城がある。

日本軍が朝鮮に侵略して間もない頃から始まった海戦で日本水軍は朝鮮水軍に連続して敗北を喫した。その対策の一環として築いた熊川倭城や慶尚道内の要害として構えた西生浦倭城も、日本軍が南海岸へ撤退した後、「仕置きの城」の体制に組み込まれて、その機能と役割を果たすようになる。（C・E）で築城の人数を配分しているのは、釜山倭城と同じく、横のラインへ展開する「拠点的本城」や「境目の城」に相応しい改築に必要な人数であると思われる。

熊川倭城は、見乃梁海峡以東に出没する朝鮮水軍に対応しつつ、南海岸への撤退後は横のラインの体制における西端の「境目の城」としての機能と役割を果たした。その周辺には（A・B・C・E）で見るように端城があり、熊川倭城を中心とする防御圏が形成された[50]。

一方、東端の西生浦倭城も「境目の城」としての機能と役割を果たした。この西生浦倭城も（C）にみえるように、同じく端城で保護された[51]。

このように両端の「境目の城」は最前線の城であるがゆえに、敵からの攻撃にさらされやすい。西端の熊川倭城には小西行長、東端に西生浦倭城には加藤清正を充てた。敵の攻撃に反撃しつつ、侵入を防ぐために両境目の城に朝鮮侵略の部隊の中で最強とも言える両大名を配置したのであろう。

④「後方支援城」

南海上の島々の「拠点的本城」に避難場所の提供や物資の供給をする特殊な役割や機能を担ったのが「後方支援城」である。この「後方支援城」としては、日本軍が南海岸に撤退する前に築いた巨済島の倭城（永登浦倭城、松真浦倭城、長門浦倭城）[52]に加え

50）朴哲『세스뻬데스（セスペデス）』（西江大学校出版部、1993年、韓国）72頁、または山口正之「文禄役中朝鮮陣から発した耶蘇会士セスペデスの書翰の研究」（『国学論叢－庸斎白濬博士還甲記念－』思想界社、1955年、韓国）749頁。前者は朴氏が葡語を韓国語訳したものであり、後者はレール氏が葡語から英訳したのを、さらに山口氏が日本語に重訳したものである。以下は後者の引用による。「一グレワばかりの周囲に種々な城郭があり、他の一つにはオウガスティン（小西行長）の義子であるツシマドノ・ダリオ（宗義智）がいます。他の城郭にはシコクと呼ばれる日本の四王国の領主（長曾我部元親）が屯し、又他には今オウガスティンの武将となっているサクマ（佐久間安次）の部下とその国から放逐されたブンゴ王の息（大友義延）とがいますが、カウンビョウエドノ（黒田孝高）はその息（長政）と共にどこか他の場所にいます」と記している。

51）日本国内の境目の城の研究としては松岡進「戦国期における境目の城と領域」（『中世の城と考古学』新人物往来社、1991年）が取り上げられる。

52）高田徹「巨済島４倭城の縄張り」（『倭城の研究』創刊号、城郭談話会、1997年）、前掲角田「文禄・慶長の役における港湾防御の一形態」を参照されたい。

て、加徳倭城があげられる。

すでに述べたように巨済島の倭城は、文禄元年5～6月に繰り広げられた海戦の惨敗を克服し、日本水軍の一時的避難や兵力温存のための機能や役割を果たすように築いたものである。巨済島の倭城も日本軍が南海岸に撤退すれば、「仕置きの城」体制に組み込まれて変貌を遂げるようになるが、後方支援城として補給・備蓄の機能や役割も果たす。文禄2年7月27日、秀吉が島津義弘に宛てた朱印状には、次の通り記されている[53]。

から嶋之内一城
一、弐千人　　さつまの侍従
一、百ちゃう内　　てつはう
　壱丁　大つゝ　　五丁　廿目
　（中略）
一、四百三十俵　　すミ
　右、武具并ゑんそ・さうし・ほし飯・いわし・すミ以下ハ自然の時のためニ籠置かれ候間、其意をなし、聊尓ニ召遣べからず也
　（下略）
文禄弐年七月廿七日（秀吉朱印）
　　薩摩侍従とのへ

から嶋（巨済島）にある一つの倭城というだけで、永登浦倭城・松真浦倭城・長門浦倭城の中でどれに当たるか特定はできないが、内容からこの倭城が物資の備蓄に伴う倉庫の役割を果たしていたことがわかる。ところが、この備蓄している物資が、通常各本城が蓄えるようなものであれば、一つの城に限定して記す必要はない。なおアンダーライン部分から明らかなように、この物資は万一の事態に備えて準備された。したがって、他の倭城に補給するために蓄えておいた物資と兵力と考えられる。

加徳倭城は、日本軍の平壌城戦闘での敗北以前は、慶尚道の要害として日本水軍の避難所、それ以降は「湊口両方」の城として機能と役割を果たしたと思われるが、日本軍が南海岸へ撤退してからは「後方支援城」として再編されていった。巨済島の倭城や加徳倭城は、物資を備蓄して横のラインに補給することまでその役割が広がった。つまり、日本水軍の避難場所はもとより、物資の補給及び備蓄場所、兵力の駐屯地としての機能を果たしたのである。

2)端城

端城には文禄元年、見乃梁海戦以降、築城したと見られる倭城洞城に加えて、（C・D・

53）注 44）と同じ。

E）では7ヶ所があると記されており、その中で椎木島倭城・東莱倭城・熊川端城・西生浦端城・蔚山倭城・地つゝきの出崎端城が確認できる。（C）で釜山倭城の端城と明記されている東莱倭城や椎木島倭城はそれぞれ本城の釜山倭城の外郭線に囲まれていない。このことから端城は本城の外郭線から離れている場所に構えたと言えよう。

この端城は本城防衛の一端を担いつつ、本城の外郭線とは離れている場所に構えて、敵の動向の監視や偵察・警戒などを行った倭城であろう。つまり、本城に攻めてくる敵を早期に発見したり、敵の急襲を防止したりして本城を守りつつ、敵の大々的な攻撃に備えて本城の兵力が戦闘態勢に臨む時間を与える防波堤のような機能や役割を担ったと思われる。

椎木島倭城・東莱倭城は釜山倭城の端城であり、地つゝきの出崎端城はともに釜山倭城を取り囲むような配置をしており、釜山本営を防衛する一環として築いた端城と思われる[54]。

ここで本城の亀浦倭城の事例から本城と端城の関係について考察しよう。亀浦倭城は日本軍が南海岸へ撤退して「仕置きの城」を整備する過程で築かれ、釜山倭城の防衛を補う機能と役割を果たす。ところが、「右応人数令割符、蔵へ可入置候、然者、其方拘之端城へも、右武具并兵糧、塩噌、さうし以下令配分、可入念候也」とあって[55]、本城の亀浦倭城に蓄えている物資をその端城に供給することを指示している。「かとかいの城、同は志ろ」[56]から、亀浦倭城の「は志ろ」（端城）の存在は明確である。つまり、本城と端城の間で指揮権の一貫だけではなく、物資も共有し協力して防御する関係がかいま見え、戦略・戦術的にセットになっていることがわかる。

（C）で名称の明記のない熊川端城の存在はセスペデス書簡にも記されている[57]。また、同じく（C）からは西生浦倭城も端城で守られていることがわかるが、詳細はわからない。

ところが、文禄2年5月朔日の「仕置きの城」築城の計画案には、「蔚山城壱ヶ所」とあってその普請担当者が羽柴対馬侍従である[58]。また、同じ日「其方者釜山浦ニ在城候て、人数者安国寺差添、うるさん表へ移動、其より都衆為迎中途へ可出向之由」とあって[59]、うるさん（蔚山）に移動をしている。また、5月9日には蔚山に城郭を構えて、亀井茲矩の在番を命じている[60]。このように蔚山倭城は日本軍が南海岸に撤退して築く「仕置きの城」の計画案に含まれていた。

では実際、蔚山倭城は築城されたのか。先行の諸研究は、文禄期の動きについて全く取

54）加徳倭城は「後方支援城」でありながら、釜山倭城の防御の一端も担ったものと思われる。
55）『大日本古文書』「小早川家文書」509号。
56）注 55）と同じ。
57）注 50）と同じ。
58）前掲『豊公遺文』448頁。
59）『大日本古文書』「毛利家文書」894号。
60）『大日本古文書』「伊達家文書」652号。

り上げておらず、慶長期の築城としている。ところが慶長3年1月4日、「うるさん新城」と表記している[61]。蔚山倭城を新城と呼んで、文禄期に築城した倭城であることをにじませているので、慶長期に先立って文禄期に築造した蔚山倭城があったのは事実であろう。ただ、築城の途中で中止したのか、あるいは完成して放棄したのか不明である。なお、その場所も慶長期の蔚山倭城であったのかどうか定かではなく、考古学的成果に期待するしかない。この蔚山倭城は東の最端に位置してはいるものの、恐らくこのときは「境目の城」ではなく、同じく熊川倭城における明洞倭城のような存在、つまり蔚山倭城や明洞倭城が端城の機能と役割を果たしたものと思われる。

以上、本城の中でも本営の釜山倭城、境目の熊川倭城・西生浦倭城に端城を集中的に配置しているのが目立つ。特に、本営の釜山倭城は数多くの端城で守られている。これは横のラインにおける釜山倭城、熊川倭城・西生浦倭城の戦略や戦術的な重要性を現していることである。

3)「繋ノ城」=「出城」

一方、「繋ノ城」も端城とともに本城の防御の一端を補う機能と役割は同じく果たしていたものの、端城と違う点についてはすでに述べてきた。この「繋ノ城」としては（F）における「熊川城」の「同繋ノ城」（Gの「コモカイツナキ城」）[62]と唐嶋ノ城の「同繋ノ城」が取り上げられる。

ところが、「繋ノ城」は必ずしも本城だけに存在するものではなく、端城でも見られる。各々の「本城」や「端城」の外郭線に囲まれながらも、若干離れたところに独立した形で敵の動向の偵察や監視をする機能を果たしたと思われる。

また、「繋ノ城」は本城に付属して突き出ていながらも、その縄張りに含まれている城と考えられことから、釜山子城台倭城も「繋ノ城」と見なすことができよう。この釜山子城台倭城は、日本軍の平壌城戦闘における敗北の後、朝・明の水軍が釜山港を攻撃してくる対策として築城したものと思われる。その位置は海と釜山倭城の中間地点に位置し、なお釜山倭城の外郭線に囲まれている[63]。

本城の外郭線に囲まれている「繋ノ城」は端城よりは本城に従属性が強いと言えよう。なお、その規模は曲輪一つくらいのもの[64]から端城に匹敵するような釜山子城台倭城まで様々である。

---

61)『大日本古文書』「浅野家文書」257号。

62) 注 50) のセスペデス書簡からも「繋ノ城」の存在がうかがえる。

63) 前掲『倭城Ⅰ』48～49頁の地図参照。

64) 例えば、慶長期の孤浦倭城の縄張りについて高田徹「梁山城の縄張り」（『倭城の研究』2号、城郭談話会、1998年）の134～135頁で、半独立的な状態の曲輪について言及している。

(2) 明との講和交渉の成立

文禄2年3月に再開された明との講和交渉は、同3・4年にも引き続き行われた。交渉中の文禄3年からは、実際休戦のような状態であった。講和交渉の末、同4年5月、日本軍は3段階に分けて各倭城から撤退することになった[65]。1次としては釜山浦の西側を中心とする巨済島の倭城・亀浦倭城などの約10ヶ所、2次としては釜山浦の東側にある林浪浦倭城・西生浦倭城・機張倭城の3ヶ所、そして3次としては釜山倭城・金海竹島倭城・安骨浦倭城・加徳倭城の4ヶ所がその対象であった。この講和交渉の内容に応じて、日本軍は倭城を破壊して段階的に兵を引き上げて1次の撤収が終わった。この時、釜山浦の西側を中心とする巨済島の倭城・亀浦倭城などの約10ヶ所が破壊された[66]。引き続き、2次の撤退に踏み切って[67]、加藤清正は西生浦倭城から兵を率いて撤退し、機張倭城に入って城の改修を行った。

2次の撤収が計画通りであれば、境目の城である西生浦倭城と拠点的本城の林浪浦倭城、そして機張倭城が破壊されることになっていた。ところが、破棄すべき機張倭城を清正が改修しており、機張倭城からは撤収しないことを示したのである。必然的に機張倭城に境目の城としての機能と役割を求められることに繋がる。『宣祖実録』によれば、この際、機張倭城に境目の城の役割を補うためとみられる土塁・石塁・空堀の構築が確認される[68]。『倭城Ⅰ』によれば、機張倭城は外郭防御線に囲まれた城郭は西生浦倭城・熊川倭城に劣らない規模を有しているとしているが[69]、まさしく『宣祖実録』の内容を裏付けると言えるだろう。これによって従来の機張倭城の機能や役割の変化が生じたものと思われる。

ところが、清正が機張倭城を改修したことが明に伝わり、明から再三抗議が出されたために、秀吉は清正を呼び戻した。そこで機張倭城を焼き払って帰還することになった[70]。

2次の撤退がほぼ終了した慶長元（1596）年9月、秀吉は大坂で明使を迎えた。ところが、明使が降表使ではなく、冊封使であったことや、自分の要求が無視されたことで激怒した秀吉は再戦を決意した。この結果、3次の撤収は行わず[71]、残りの倭城の機能と役割を温存しつつ、新たな局面に対処していく。

65）藤本正行「倭城の歴史」（『倭城Ⅰ』倭城址研究会、1979年）。

66）前掲『佐賀県史料集成』（古文書編3、「鍋島文書」）96号の文禄4年5月22日付、寺沢広高宛の朱印状で「かとかいの事、不入所ニ候間、令破却」と命じている。

67）『大日本古文書』「島津家文書」434号（慶長3年3月13日）、秀吉朱印状に明の沈惟敬との講和によって倭城数十ヶ所を減らしたと記している。

68）『宣祖実録』乙未（文禄4年）10月甲子の条。

69）前掲『倭城Ⅰ』99頁。

70）「乱中雑録」（古典国訳叢書54『大東野乗』Ⅵ、民族文化推進会、1971年、韓国）の丙申（文禄5年）「豆毛浦（機張城）賊将清正、連続撤去」とある。

71）『懲毖録』（明文堂、1987年、韓国）には「九月･･･又撤西生浦・竹島等屯、其未撤者、只釜山四屯」とある。つまり、西生浦倭城・金海竹島倭城からは撤退しており、撤退していないところは、ただ釜山倭城の4ヶ所としている。

3．慶長期の再侵略における南海岸倭城

秀吉が再侵略の決意のもと、慶長２（1597）年２月21日、新たな陣立を指示して侵略に乗り出す。本章では、その再侵略によって南海岸の倭城にはいかなる変化が生じ、またその中でどんな機能と役割を果たすのか考察する。

日本軍は再侵略に乗り出して、南海岸倭城を拠点としつつ全羅道を平定し、忠清道まで進んだ。南海岸の各地に築いていた倭城に加えて、さらに「仕置きの城」を築き、その普請には日本へ帰還予定の兵をあてるよう秀吉から指令された。これによって慶長２年、順天倭城、南海倭城、泗川倭城[72]、固城倭城、馬山倭城[73]、梁山倭城、蔚山倭城[74]を築いた。そして明との講和交渉によって、一旦破棄された倭城に再び入って使うようになり、その機能と役割を取り戻した。一旦廃棄した倭城を再利用するためには改修が行われたものと思われる[75]。再侵略を決意してから築城された倭城は●印で示している。（図１）を参照されたい。

ところが、再侵略によって東西の前線はさらに拡大されて、東端は蔚山、西端は順天までとなった。つまり、横のラインが広がったためそれぞれの本城が攻撃にさらされやすい状況になり、防御には著しい手薄が生じた。こうした状況をいかに克服し、朝・明軍と戦っていくかがこの時期の倭城に課せられた課題と言えよう。

1）本城

①拠点的本城

再侵略に際して、文禄４（1595）年に明との平和交渉によって破壊して撤収した各城々に再び日本軍が入った。それらを拠点にしつつ、新たに泗川倭城・固城倭城・馬山倭城・孤浦倭城も築いた。慶長３（1598）年10月１日、泗川倭城を明軍が攻撃してきたが、島津義弘が撃退した[76]。この攻撃は横のラインが伸びきったために起きたもので、順天倭城の孤立を狙ったものであろう。

固城倭城と馬山倭城は本城であるが、熊川倭城を遠距離から防衛するための機能と役割もあったと思われる。

72）『壬辰草録』万暦20年６月14日、啓本「状８」には「望見泗川船滄、則一山透辻七八里許形勢峻嶮、賊倭無慮四百余名、長蛇結陣、乱挿紅白旗麾、駭眩人目、陣内最高山嶺、別設帳幕」とあり、文禄元年、すでに日本軍が泗川の山頂に陣屋をとっていたことがわかる。

73）『大日本古文書』「浅野家文書」427号。

74）この時期の蔚山倭城は『大日本古文書』「浅野家文書」256号によれば、普請に加藤清正・中国衆・浅野幸長が当たっていたことがわかる。

75）堀口健弐「巨済島４倭城の石垣」（『倭城の研究』創刊号、城郭談話会、1997年）100頁では、巨済島の倭城について石垣修復箇所が多く見られるころから再侵略の時、再利用された可能性を指摘する。

76）村井章介「島津史料からみた泗川の戦い」（『歴史学研究』736号、青木書店、2000年）。

孤浦倭城は、文禄期に築いた亀浦倭城の前方に配置されているので、戦術・戦略的に重複する配置になる。亀浦倭城は文禄4年、日本軍が撤退した後、再侵略した時に修復しておらず、それに代わった孤浦倭城は本城に近い倭城であると見なしたい[77]。慶長期の「仕置きの城」体制、つまり横のラインが伸びきることによって生じる釜山倭城防御の手薄さを克服するための機能と役割を孤浦倭城も果たしたのであろう。

②本営

横のラインが東西に伸びきったために釜山倭城の防御に手薄さが生じたのは確かである[78]。この防衛の問題を克服するために釜山城の前方に本城の孤浦倭城や端城の梁山倭城、そして農所倭城・馬沙倭城を配置したのであろう。これらの倭城によって釜山城を中心とする防御圏がより強化された。

③境目の城

再侵略期には両端の最前線の境目の城も熊川倭城や西生浦倭城からそれぞれ蔚山倭城と順天倭城へその機能と役割が移っていった。これによって蔚山倭城、順天倭城が東西両端の最前線に位置したので敵にさらされ、攻撃の的となった。

日本軍は再侵略とともに慶長2年8月中旬、南原城を攻め落として全羅道南部における朝鮮の政治・軍事的要所を押さえた。文禄2年の晋州城攻撃と同様、全羅道南部において戦略的脅威となる朝鮮勢力の拠点を制圧することによって順天倭城の安全をはかったのである。

順天倭城の現地調査を行った高田徹氏は、西側に対して徹底した遮断機能を有する外郭線と虎口の限定化は、陸続きである周辺地域からの隔絶化を意図したと思われる。その第一の原因は軍事的な要請が強く働いた点が考えられるとする[79]。これは境目の城としての反映であろう。

一方、蔚山倭城は慶長2年11月10日、日本軍が普請に乗り出し、いまだ完成されていない12月22日、朝・明軍に包囲された。12月26日、毛利秀元をはじめとする日本軍の蔚山倭城救援部隊は西生浦倭城に集まり、翌年1月4日に囲みを解くまで蔚山倭城は厳しい籠城戦を強いられた[80]。とりわけ1月2～3日、朝鮮・明軍の蔚山倭城への総攻撃に対して

77）ところが、八巻孝夫「明治から敗戦までの城郭研究の流れについて」（『中世城郭研究』10号、1996年）、そして長正統（『文禄・慶長の役城跡図集』佐賀県教育委員会、1985年）で孤浦倭城は亀浦倭城の端城と推定している。これに対して前掲高田「梁山城の縄張り」135～137頁は、否定的見解を示している。

78）『大日本古文書』「島津家文書」983号。慶長3年、「境目の城」で朝・明軍と日本軍の戦闘が一段と激しかった時期の釜山倭城の機能と役割がかいま見える。

79）高田徹「順天城の縄張りについて」（『倭城の研究』2号、城郭談話会、1998年）44頁。

80）『大日本古文書』「浅野家文書」255号。再侵略に突入すると、以前の在番体制とは異なり、各武将が応援のために蔚山倭城に押し寄せる。また前掲「征韓録」257～258頁にも、諸武将が蔚山倭城に駆けつけている様子が記されている。

日本軍も必死に戦って防衛した。この時、救援軍として蔚山倭城へ行った黒田長政はそもそも梁山倭城の在番に当たっていた。このように戦闘が激しさを増してくると、本城を中心とする端城・「繋ノ城」の防御体制を飛び越えて、他の本城を支援する戦術・戦略へ変更を余儀なくされた。つまり、一つの本城を拠点とする防御体制を維持しつつも、臨機応変の防衛に突入したのである。同じ番隊や一人の武将の指揮権のもとで拠点的本城を中心に防御する体制が崩れた。

さらには、蔚山倭城の総力戦の後、諸大名が安骨浦に集まって会談を行い、宇喜多秀家らによって蔚山倭城・順天倭城・梁山倭城を破棄する、前線の縮小案を秀吉に提出した。

（H）ア一、蔚山之儀、最前御左右次第ニて、可相定と雖致言上候、能々吟味仕候へハ、所柄出過、難所川越ニて、以来迄無心元所ニて御座候間、如先々西生浦を先々加藤主計頭在番仕候ニ相究申、安芸宰相人数之内五千人残置、普請申付候事

イ一、小西居城順天之儀、大河をへたて、路次筋難所ニて手告苦候て、船付遠干潟に候へハ、自然の時、海陸共ニ加勢難成所ニて御座所之間、川東只今、島津城泗川へ小西罷移、島津者固城へ被移候へと申渡候、南海島之儀、順天被取入上者、海陸共ニ被入所と各存知、から嶋瀬戸口之城計丈夫ニ被相残尤之由、雖然摂津守・対馬守不致同心候、島津儀儀者、先手次第ニ可仕候由、此上者御諚次第ニ相究可申候事

ウ一、梁山之儀、是又第一城所悪、釜山浦之間、別而節所之間、自然之時、人数之出入、難成所柄ニ御座候間、如先々かとかひへ仕替（下略）[81]

蔚山倭城・順天倭城・梁山倭城のいずれも「難所」に位置していることを理由にしている。地理的に隔絶されたような場所にあるので、非常時に陸地や海から応援するのが難しいことを強調している。自然地理的条件だけではなく、釜山倭城・熊川倭城・西生浦倭城から離れすぎているのも廃棄理由の一つだったのであろう。ところが、廃棄が見送られた境目の城としての軍事的要塞である順天倭城は、蔚山倭城と同じように朝鮮・明軍の大がかりの攻撃をうけた[82]。

ともかく境目の城は敵の攻撃にさらされる危険性があるので、再侵略以前の境目の城である熊川倭城や西生浦倭城に在番していた最強の部隊を率いる加藤清正と小西行長を、さらにそれぞれ蔚山倭城や順天倭城に移動させて在番に当たるようにしたのである。ところが、慶長期の境目の城である蔚山倭城や順天倭城は、文禄期の熊川倭城や西生浦倭城のように端城や「繋ノ城」で補強した痕跡はほとんどない。

81）『大日本古文書』「島津家文書」1206号。慶長3（1598）年1月26日のことである。

82）順天倭城に対する朝・明軍の凄まじい攻撃については、黒田慶一「南海城と『征倭紀功図巻』」（『倭城の研究』4号、城郭談話会、2000年）を参照されたい。

④後方支援城

再侵略期の後方支援城としては南海倭城が築かれるが、これは西側の倭城が順天にまで拡大することによって生まれたのであろう。ところが、（H）イのアンダーラインでは、順天倭城から小西が島津のいる泗川へ移動し、島津が固城倭城に撤収すれば南海倭城は海陸両面の戦略において必要がなくなるということである。そこで高田徹氏は順天倭城と南海倭城がセットになって機能したとする[83]。確かに後方支援城としての南海倭城は順天倭城にウェイトを置いたことは明らかである。さらに、南海倭城の位置から見て順天倭城のみならず、泗川倭城・固城倭城まで後方からの支援をしたものと思われる。

この後方支援城も再侵略以前と同様、水軍の避難、補給や備蓄に加えて撤退基地の機能も果たしていた。順天倭城で朝・明軍の攻撃をうけた日本軍が南海倭城へ、さらに巨済島に撤退した[84]。つまり、南海倭城が順天倭城で敗北した日本軍の撤退する場になっており、後方に構えて撤退を支援する城になっていた。このときの巨済島もともに「後方支援城」の機能と役割を果たしていたことがわかる。

以上、後方支援城は日本軍の再侵略に伴って戦闘が激しさを増してくると、避難・物資の備蓄・補給だけではなく、撤退基地としての機能と役割も加えた。

2)端城

この時期に築いた端城は梁山倭城・農所倭城・馬沙倭城である[85]。いずれの端城も横のラインが東西に伸びきることによる釜山倭城防御の手薄さを補うため、築城したものと思われる。

梁山倭城は慶長２年12月６日、「赤国・青国相動悉平均申付、梁山へ罷出仕置之城拵、其方居城之由尤ニ思食候」[86]のように、赤国（全羅道）や青国（忠清道）を平定した後、築いた「仕置きの城」である。現地調査に当たった高田徹氏の報告によれば、石垣が低いとしつつ、孤浦倭城との密接な関係を推測している[87]。この石垣が低いということは、防御力の低下と結びつく。このことは梁山倭城が拠点的城ではなく、孤浦倭城の端城としての機能と役割を果たしたためと考えられる。

その立地は王城（漢城）へ向かう路次に位置している[88]。梁山倭城は漢城に攻めていく時も釜山が攻められる時も軍の攻撃路に当たる場所にある。したがって、梁山倭城は端城として孤浦倭城の防御の一端を担いつつも、釜山倭城の防御に繋がったのであろう。

83）前掲高田「南海倭城の縄張り」20頁。

84）前掲「征韓録」306～312頁。前掲黒田「南海倭城と『征倭紀功図巻』」では、日本軍が順天倭城から南海倭城にまで無事に撤収したのではなく、朝・明軍によって追撃され、全滅状態に陥ったことを、『征倭紀功図巻』を通じて明らかにしている。

85）農所倭城・馬沙倭城は築城時期が不明であるが、再侵略における横のラインの拡大による釜山倭城の防衛も考慮して金海竹島倭城の端城として築城したと思われる。

86）前掲「長政記」

87）前掲高田「梁山城の縄張り」134～136頁。

88）前掲「長政記」に「王城への大筋梁山といふ所に長政居城し給ふ」とある。

文禄期にその機能と役割を果たしていた亀浦倭城があるにもかかわらず、その前方に孤浦倭城を築いたのは、明との講和交渉による廃棄をした後、亀浦倭城が修復されていないことを示す[89]。ところが、（H）の蔚山倭城・順天倭城・梁山倭城の破棄提案に対して、3月13日の秀吉朱印状に「梁山城不入所候間、かとかいへ可引入之由、被仰遣候」[90]とあって、秀吉は梁山城を廃棄してかとかひ（亀浦倭城）に合併したに止まった。これによって亀浦倭城が再び機能するようになると思われる。梁山倭城からの撤退によって孤浦倭城が釜山倭城の前方における最前線となる。

高田徹氏によれば、農所倭城と馬沙倭城の両城はともに石垣が低く、金海竹島倭城と比べて格段に防御能力が劣るし、単独で機能せず金海竹島倭城の一端を担う支城であると推測している[91]。

3)「繋ノ城」

慶長2年、「忠清道にいたり数か所をせめ落し安骨浦に帰りて附城を築」[92]とあるように、藤堂高虎が忠清道を攻め落とした後、安骨浦に帰ってきて「附城」を築いた。この「附城」の実体はわからないが、ある倭城に付属しているという言葉自体の意味が強いことから「繋ノ城」であると思われる。このように各本城や端城には必要に応じて「繋ノ城」が築かれた。他にも孤浦倭城や梁山倭城の「繋ノ城」が取り上げられよう。

高田徹氏は、孤浦倭城は北側の谷を隔てた尾根上に出曲輪状の独立した曲輪をおいていると指摘している[93]。この外郭線に含まれていながらも独立したこれらの曲輪が「附城」、つまり「繋ノ城」と言えよう。また、氏は梁山倭城には主郭に対して半独立的に機能する出曲輪が存在するとし、倭城の機能・目的・役割等が一部で分化したことを伝えるものとしてとらえている[94]。この半独立的な機能をする出曲輪も「繋ノ城」に当たるものと思われる。

このように日本軍の再侵略による朝鮮・明軍の反撃が激しくなると、従来の本城を中心として端城や「繋ノ城」の防御体制を維持しつつも、これを飛びこえて激戦地に応援に向かう臨機応変の戦略・戦術に変わった。特に、蔚山や順天まで「仕置きの城」の配置が伸びきることによって、釜山倭城の防御が手薄になるという問題が生じ、この問題を補うため釜山付近に、以前の倭城に加えて、さらなる本城・端城・「繋ノ城」を築いた。つまり、釜山本営を中心に周辺の各城郭が連携して防衛圏を形成しているのである。しかし、蔚山

89）前掲『倭城Ⅰ』61頁。

90）『大日本古文書』「島津家文書」434号。

91）前掲高田「金海竹島倭城の縄張り」110頁。日本では端城と支城を同じものとして取り扱っている。ところが、文禄・慶長の役を通じて支城は確認できないので、端城ないし側城と称すべきであろう。

92）前掲『高山公実録』上巻、109頁。

93）前掲高田「梁山城の縄張り」135頁。

94）前掲高田「梁山城の縄張り」131～134頁。

倭城と順天倭城には端城や「繋ノ城」の補強が見られない。

おわりに

以上、文禄・慶長の役において日本軍が朝鮮半島の南海岸に築城した倭城について考察を行った。その内容を簡単にまとめると、以下の通りである。

南海岸では、侵略当初の文禄元（1592）年4月から「船付」として釜山倭城を築城した。ところが、地上戦の勝利とは異なって海戦で日本水軍が朝鮮水軍に相次いで惨敗すると、同年5～6月に秀吉は海戦を中止し、日本水軍の避難する倭城の築城を命じて、巨済島の倭城と熊川倭城が築かれた。こうして南海岸には巨済島の倭城と熊川倭城が登場した。また、慶尚道内の要害として安骨浦倭城・加徳倭城・金海竹島倭城・西生浦倭城も築城された。これらの倭城は海戦対策はもとより釜山から漢城（ソウル）、ひいては最前線までの縦のライン（伝えの城）を遠隔支援する機能と役割を果たしたのである。これらが南海岸に築いた第1段階の倭城である。

一方、漢城まで進撃した小西行長部隊は、さらに平安道の攻略に乗り出したが、明軍の参戦もあって平壌城で敗戦を喫し、文禄2年1月16日に漢城に撤退し、他の部隊も2月下旬までには漢城に集まった。さらに4月18日には南海岸まで撤退して、「仕置きの城」を築城した。これによって縦のラインから横のラインへ戦術・戦略が変わり、「仕置きの城」が誕生するようになった。これ以前、南海岸に築いた倭城は「仕置きの城」体制に組み込まれた。

この「仕置きの城」には「本城」・「端城」・「繋ノ城」があって、それぞれ果たした機能と役割が違っていた。つまり、「本城」は基本的に「拠点的城」の機能と役割を果たしつつ、それぞれが「本営」・「境目の城」・「後方支援城」の機能と役割ももっていた。また、「端城」は「本城」の外郭線から離れた場所に構えて「本城」防衛の一端を担い、「繋ノ城」は「本城」ないしは「端城」の外郭線に囲まれながらも、独立した形でそれぞれの防衛の一部分を補った。「本城」は各番隊の大名の指揮権のもとにあって、相互が本営の釜山倭城、境目の熊川倭城・西生浦倭城に端城や「繋ノ城」を配置して防衛力を強化し、いわゆる横のラインの体制における3大防御圏を形成した。これらは第2段階における南海岸の倭城である。

文禄4年、断続的に行われてきた明との講和交渉が不調に終わり、日本軍は再侵略を行って新たな「仕置きの城」の築城も行った。再侵略期には横のラインが東端の蔚山から西端の順天まで広がることによって防御範囲が広くなり、防御が手薄になるという問題が生じた。そこで、釜山倭城を守るためにその周辺に倭城を新たに築いて、釜山倭城を中心とする防御圏のさらなる強化が行われた。しかし、蔚山倭城や順天倭城には「端城」や「繋ノ城」を築城しなかった。

日本軍の再侵略は朝鮮・明軍の激しい反撃を招き、本城を中心とする端城や「繋ノ城」が担った機能と役割を飛びこえて他の倭城の諸武将を激戦地に応援に向かわせる臨機応変

の戦略・戦術に変えていった。これが第3段階であるが、日本軍の戦闘状況の不利によって倭城の変則運用が余儀なくさせられたのである。

ところが、従来の研究では文禄・慶長の役における南海岸倭城の築城時期を、文禄期・慶長期に二分しており[95]。日本軍が南海岸へ撤退する前、南海岸に築いた倭城に対する分析が希薄であった。

このような先行研究の問題点を踏まえて、本稿では戦況の推移に注目して（図1）のように南海岸倭城の築城を3段階に分けた。すなわち、日本軍の平壌城敗戦までの攻撃中心体制、南海岸へ撤退した後の明との講和交渉による倭城の廃棄までの膠着状態、そして再侵略期の日本軍の不利な状況に分けて分析を行ったのである。

この試みによって、先行研究では明らかにされてこなかった日本軍が南海岸へ撤退する前、南海岸に築城した倭城の存在や、その機能と役割を明確にした。その中で南海岸の倭城の在り方、とりわけ戦況に応じた倭城の連帯や全体的観点からする倭城の機能と役割についても追究することができた。

今後は、倭城の在り方や戦況に応じた変化に着目した本稿での成果に基づいて倭城をめぐる今までの諸研究を、さらに洗い直してみるのが課題と言えよう。

95）前掲『倭城の研究』（創刊号）や前掲『倭城Ⅰ』など。